

未来から来た闇の巨人と虹の女神達

愛波優斗

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

遠い未来で三人の光の巨人と闇の巨人が戦っていた。

そんな時、いきなり時空に歪みが発生すると巨人達はその歪みに吸い込まれてしまう。

そして、巨人達は気が付くとそれぞれ実体をほぼ保てなくなつた状態で、四人の青年達と出会う。

これは、一人の青年と闇の巨人がスクールアイドルと共に成長する物語である。

目

次

第一話 ファースト・コンタクト
第二話 仲間と用心棒怪獣
第三話 閻の巨人と優しき少女

7 4 1

第一話 フアースト・コンタクト

遠い未来で三体の光の巨人と一体の闇の巨人が激闘を繰り広げていた。

『止めるんだ、○○○○○○!!こんなことをしても争いは無くならないんだぞ!!』

と赤と白の巨人が叫ぶと、黒色の巨人は

『だまれ!!お前らに何が分かる!!友を失った俺の気持ちが!!』

と怒鳴ると青と赤の巨人は

『お前の気持ちは解らなくはない!!だが、この世界を壊していい理由にはならない!!』

と言つて黒い巨人に持つっていた刀で斬りかかると

『くつ、そんなの分かつてる!! けど、もう引き返せないんだよ!!』

『モンスライド』 『エレギング ランサー』

と言う機械音と共に黒い巨人は白と黒の騎士の用なアーマーを纏うと、刀を槍で受け止める。

すると、背後から黄色と赤の巨人が驚愕した様な声で

『その鎧は一体!?』

と言ふと黒い巨人は

『○○○○○○○○○○○○○エレキングランサー。それが、この姿での俺の名前だ』

と言うと槍を構えて

『これで、さよならだ!!サンダーランスエンド!!』

と言つて雷の雨を降らすと三体の巨人はそれぞれ

『ナイトセイバアアアアアアアアアア!!』

『ホープブレイカアアアアアアアア!!』

『ラストショットオオオオオオオ!!』

斬撃と光線を放つとそれぞれの攻撃がぶつかり合うといきなり、時空に歪みが発生し四体の巨人は

『『うああああああああああ!!』』

『グアアアアアアアア!!』

その中に吸い込まれてしまう。

——???

「うーん、今日の晩ご飯どうするべきだろう?」

と一人の青年が歩いていると、電信柱の近くに黒色の戦士が倒れて
いので青年は急いで近か付くと

「大丈夫ですか!?

と言つて黒の戦士の方を貸すと

『お前は一体?』

と言うので青年は 慌てて名乗ると

「俺は未来 優です。」

と言うと黒の戦士は

『お前に頼みがある!!』

と言うと一つの黒の戦士が描かれたカードと怪獣の形をした鍵と
一緒に白色のデバイスの様な物を渡してくるので優は
「これって、エレキングの形をした鍵?」

と聞くと黒の戦士は

『これは、フューチャーデバイスとウルトラキー。そして、もう一つは
エレキングキーだ。暫く、私はこの中で休んでいるのでこれを持つて
いてくれ。頼む!!』

消えそうな声で言うと優は

「分かりました。聞きたいことはあります、体調が良くなるまで休
んでて下さい。」

任せろといわんばかりに言うと黒の戦士は

『助かる』

と言つて光の粒子になつて、デバイスの中に入つていく。

そして、優が黒色の戦士を助けたのと同じ時間に他の場所でも三人
の青年がそれぞれ、赤と白の戦士、青と赤の戦士、黄色と赤の戦士を
助けていたので合つた。

四人の青年は助けたことがこれから運命を左右することになる
なんて、まだ、この時は知らなかつた。

第二話 仲間と用心棒怪獣

一人の青年は夢を見ていた。

光の巨人が闇の巨人になつた理由の夢を……。

光の巨人の名はウルトラマンフューチャー、優しい未来のウルトラマンである。

『俺がお前を絶対に守つてみせる。だから、安心しろ○○○。』
『何故だ!!確かに怪獣はウルトラマンの敵だ!!だが、○○○に敵意は無かつた!!なのに、なんで、殺したんだ!!ウルトラマン○○○』
『・・・・』

『答えるよ!!』

『すまない』

『ふざけんなよ!!』

『落ち着け!!フューチャー!!』

『そうだよ!!あれは、単なる事故だつたんだよ!!』

『○○○先輩もそうするしかなかつたんだ!!』

『なら、お前らは事故つて理由で友を殺されて落ち着いていられるのか!?!』

『』・・・・』

『もういい、勝手にしろ!!』

こうして、ウルトラマンフューチャーは光の国から去つた。

—現在—

「はあ、はあ、今のは夢?」

『いいや、今お前が見たのは紛れもなく俺の過去だ』

と声がするので振り向くとそこには昨日のデバイスが置かれており、そこから

『昨日は助かつた。』

声がするので、俺は

「ねえ、君は一体何者なの?」

と呟くとデバイスからは

『俺は、悪に落ちたウルトラマンだよ。』

悲しそうに呟くので俺は

「本当にそうなの? 俺にはそれは見えないよ」

デバイスに向かって呟くとデバイスから『は?』と戸惑っているよ

うな声がするので俺は

「だつて、本当に悪い奴は自分の事なんて悪なんか言わないと思う。」

と言ふとデバイスからは

『なら、お前からは俺はどう見えるんだ?』

と聞かれるので俺は

「怪獣思いの優しいウルトラマンかな? それに、昨日、ウルトラマンさんを助けた時にエレギングはこう言つてたよ」

「フューチャーさんを助けて欲しいってね?」

と言ふとウルトラマンさんは

『お前?! エレギングの声が聞こえるのか』

と驚愕の声をあげるので、俺は

『俺さあ、昔から怪獣の泣き声が聞こえるんだ。まあ、はつきりではな
いけど』

と寂しそうに呟くとウルトラマンさんは

『そうか』

と呟くといきなり

「ウルトラマンさん『フューチャーでいい』え?』

ウルトラマンさんはと言ふので俺は驚いていると

『お前には、そう呼んで欲しい』

と言ふので俺は

『そつか、ようしく!! フューチャー!!』

と言ふと、フューチャーは

『ああ、こちらこそよろしくな!!』

と言つた瞬間、外から『きああああ!!』叫び声があるので、俺は

咄嗟にデバイスを持つて外に出ると

「あの怪獣つてたしか」

『「ブラックキング』』

『用心棒怪獣 ブラックキング』が街の方に向かつていた。

第三話 閻の巨人と優しき少女

俺はブラックキングが向かっている町を目指して走っている。

『優!!そつちは危険だ!?今すぐ、戻るぞ!!』

とフューチャーは言うので、俺は

「ふざけないで下さい!!あのブラックキング泣いてます!!怪獣にだつて、意志がある。心があります!!だから俺は、」

叫びながら走っているとフューチャーは昔の事を思い出す。

ーとある惑星ー

『これで、決める!!』

『ナイトセイバアアアアアア!!』

と言うと赤と青の巨人は持つている刀から青い斬撃を放つので俺は

『フューチャープロテクト!!』

咄嗟にエレギングの前に立つと透明なバリアを張りエレギングを守る。

すると、赤と青の巨人は

『フューチャー!?何故、怪獣を守る!?』

と叫ぶので俺は

『怪獣にだつて、意志がある。心がある。だから、俺は怪獣とだつて、一緒に生きていくと思ってる。だから、何があろうと俺は怪獣を守る。』

と叫ぶと赤と青の巨人は

『そんなのウルトラマンの意志に犯す!!』

と否定するので俺は

『そうかもな、けど俺は諦めない!!』

と言つて赤と青の巨人の前に立ち塞がる。

ー現在ー

『優、力を貸してやる。あの、ブラックキングを護れるだけの力を』

とフューチャーが言うので俺は

「本当に?!」

と驚いているとフューチャーは

『フューチャーデバイスにウルトラキー差し込んで、天に掲げろ!!』

と言うので俺は

「ウルトラキー、セット!!」

とウルトラマンフューチャーが描かれたカードをフューチャーデバイスにセットするとそのまま、デバイスを天に掲げて、

「フューチャアアアアアアアア」

と叫ぶと

『フューチャードライブ!!』

『ウルトラマンフューチャー!!』

俺は黒い光に包まれる。

ー??ー

「お願い、止まつて!!」

一人の金髪に白い花の髪飾りを付け、ギャルともいえる見た目をした少女がブラックキングを追つていた。

(アタシがあの時、ブラックキーにあんな事言わなければ!!)

すると、ブラックキングは少女に向かつて口から炎を放った瞬間、「ごめん、ブラックキー!!」

少女の瞳から涙が地面に落ちた瞬間、黒い光が降り立つと同時に少女は目を見開く何故ならそこには黒い巨人が立つており、その巨人は『俺の名はフューチャー』

と名乗るとブラックキングに向かつて

『闇を抱いて命を救う光となる』

と言うとブラックキングに向かつて走りだす。

－フューチャー&優 視線－

『フューチャー、分かつてると思うけどあんまりブラックキングに攻撃がするのは避けてよ』

『分かつてている』

とフューチャーと話しているとブラックキングいきなり口からマグマの光線を放つので

『「フューチャーシールド』』

透明な光のバリアを張り、マグマの光線を防ぐと俺は違和感を抱くとをフューチャー

「ねえ、ブラックキングの瞳の色って、たしか赤色だよね?」

に言うとフューチャーは

『ああ、それがどうした?』

普通に答えるので、

「なら、なんであのブラックキングの瞳は紫色なんだ」

俺は叫ぶとブラックキングは俺達に突進してくるので、

『しまつ!』

それを諸に喰らつてしまふと

『グアアアア』

ビルごと巻き込むように吹き飛ばされてしまうがなんとか、立ち上がるどフューチャーは

『けんな』

何か呟くので俺は

「フューチャー?」

呟くとフューチャーは

『ふざけんな!!こんなのある時と一緒にやねえか!!』

と言つてブラックキングを抑えると

『おい、ブラックキング落ち着け!!お前は今、操られるんだろ!!』

と必死にさけぶので俺は

『フューチャー、操られてるつて一体どういうことですか!?』

と慌てて叫ぶとフューチャー悲しそうに

『昔、俺はこの状態と似た怪獣と戦つたことがある。その時はなんとか、助けることができた』

と呟くので、俺は

「なら、今回も『無理だ!!』なつ!?」

『今回も助けましよう』と言おうとしたがフューチャーに否定すると

『あの時は、あるウルトラキーを使って助けることが出来たが俺は今、そのウルトラキーを持つて無いんだよ!!』

と叫ぶので俺は

「だから、諦めろと言うのですか!? 目の前で助けを求めている怪獣がいるのに!!」

と叫ぶとフューチャーは

「俺だつて、助けたいさ!! けど、今の俺達じゃあのブラックキングを救えないんだよ!!」

と言ふとブラックキングに蹴りを入れるとそのまま腕をクロスさせて、

『フューチャー 「やめて!!」 何!?』

光線を放とうとした時だつた、一人の少女が倒れたブラックキングの前に両手を広げて立ちふさがる

「お願い、この子を殺さないで!!」

と叫ぶと少女は

「ブラックキーは本当は優しい怪獣なの!!だから、お願いします。アタシの大切な家族を殺さないで!! フューチャーさん」

と言ふので、フューチャーは

『なあ、一つだけ聞かせてくれ。何故、一匹の怪獣のためにそこまでする?』

と少女に聞くと少女は

「そんなの、決まってる!! ブラックキーは愛さんの大切な家族だから」と叫ぶとフューチャーは

『フツ、なら救わないとなあ!!』

と言ふとブラックキングが再び立ち上がるの

『優!! ブラックキングを救うぞ!!』

と言つて構えるので俺は

「ああ」

頷くと同時に

『「俺達がお前を救う!!』』

と叫ぶ。